

「ネウボラ保健師が関わる育ちと暮らし

お互いの思いをぶつけ合うエネルギーをもつ文化があつてこそ」

貴重なお話をありがとうございました。

フィンランドがPISAで世界一位であり、教育制度が充実しているということは以前、メディアの情報で見聞きしたことがあったのですが、どのような教育がなされているのか、どのような社会やひとびとのつながりがあるのかは存じ上げなかったので、とても興味深く拝聴させていただきました。

日本の教育はきつく校則や教育基準によって縛られていて、単一的な横一線の教育がなされていて融通が利かないと感じています。飛び級制度があつたってそれも実質的には活用されていないし、少しでも皆と違う行動を取ると奇異の目で見られてしまう。

大学へ行けば、高校までの「単一的な教育」「自由のない縛られたクラス単位での団体生活のめんどくさい空気」から解放されると期待していました。ところが、看護学科は実習があり出席管理もとても厳しく、必修科目ばかりで最初から時間割が決められていて、選択の余地がない。大学なのに自分が興味をもったことを選択して学べない。小・中・高の延長線上でとても窮屈でしそれは大学院生のいまもそうです。

今春大学を卒業して、大学院に進学しました。

大学院ではさすがに解放されると思ったのに、今も毎週グループでのプレゼンテーションがあり、学びの範囲が狭まれて結果としてまたしても窮屈です。

フィンランドの学校現場の話を知って、とくに中学・高校の生徒は時間割を自分で作り、登校時間もフレックスタイムで厳格な規則もないという点にとっても驚きました。

学生の自主性に比重が置かれていて自分で選べる一方、やらなければ置いていかれて遅れを取るというある意味とてもシビアな教育制度だと感じました。日本と異なり、無理やりやらされるのではなく、自分の意思で取り組むという点がその後の学びや成長につながっているのだと感じました。

教科書検定制度がないのは驚きました。

「学校でルールを守らなければいけないと言われるが、それは黙っていることではない。不平をいう人も必要だ」という言葉は、日本の教科書にも書いてほしいなと思いました。

「インクルーシブ教育」も障害のある子どもだけが特別なのではなく、すべての子どもに合理的配慮の上で教育を受ける権利があるという点はとても目から鱗でした。

日本のインクルーシブ教育は特別な生徒への配慮だけに焦点が置かれているように思えてなりませんでした。

調和を重んじるのであるならば、生徒同士が互いに配慮し、尊敬し、共存して生活できるような教育を行ってほしいと思います。

特に関心をもったのは、ネウボラ保健師の活動です。日本はハイリスクへの支援が手厚くなりがちで、多くのひとが求めているような低次のリスクに対する支援は希薄だと感じています。

「こども家族支援の見取り図」でみせていただいたように、母子保健ネウボラだけでなく普遍的な全員が対象の基本サービスが基盤になっている構図、継続的な個別性を配慮した支援を重ねることで、専門的な高次の支援を必要とせず、リスクを低減できている点がとても印象的でした。

日本では保健師と言っても保健師の存在や職務、看護師免許をもっている人間でなければ保健師にはなれないことなど保健師の存在感が薄く、浸透していないのが現状です。

「医療職者はヤクザみたいだ」とある教授が言っていますが、お互いの「シマ」があり、互いの既得権益のために他の職種から手を出されることを嫌う面があります。

多職種連携が重要だと言っても具体的な連携の方法が見えてきません。専門職の位置付けが異なるので、全てを参考にはできませんが、子ども家庭センターが上手く機能することを期待しています。

フィンランドのひとびとの「不平不満をぶつけあって話す文化」と日本の「そつなくこなそうとする波風立てない文化」は正反対ですが、お互いの思いをぶつけ合うエネルギーをもつことが、日本人にも必要なのではないかと考えました。